Bulletin of the Graduate School of Education and Human Development, Nagoya University (Psychology and Human Development Sciences) 2002, Vol. 49, 93 − 104.

高齢者の時間的態度の特徴についての一考察

── 青年との比較から ──

原　田　一　郎[1)]

【問題と目的】

老後を幸福に過ごすことは，誰しも望むことであろう。それでは，幸せな老後とはどのような老後なのであろうか。万人に共通する幸せな老後の感覚というものがあるのであろうか。社会学，心理学などの各分野における老年期研究においては，幸せな老後は「幸福な老い(successful aging)」の概念として表現され，研究が蓄積されてきた。

このような「幸福な老い」を測定する指標としては，従来，「主観的幸福感（subjective well-being)」と呼ばれる，主観的な人生や生活の質の評価が用いられることが多かった。主観的幸福感を測定する尺度としては，PGC モラールスケール（Philadelphia Geriatric Center Morale Scale; Lawton，1972，1975）や生活満足度尺度 A (life Satisfaction Index A; LSIA; Neugarten，et.al. 1961)，主観的幸福感尺度 K（Life Satisfaction Index K；古谷野・柴田・芳賀・須山，1989，1990）などが主に用いられている。さらに，これらの尺度の作成・分析に伴い，主観的幸福感には「人生全体についての満足感」「心理的安定」「老いについての評価」の下位次元が存在することや，それらの因子構造の不変性も明らかにされている（古谷野，1990)。

さて，上記の主観的幸福感尺度を，「幸福な老い」を測定する指標として用いた研究には，膨大な蓄積があるが，このような主観的幸福感研究とは異なる側面から，「幸福な老い」にアプローチする研究もこれまでにいくつかみられる。例えば，河野・金川（1988）は，高齢者の主観的な生活の質は，複数の切り口から評価されるべきであるとして，主観的時間を「幸福な老い」の切り口の一つとして取り上げている。また，児玉・古谷野ら（1995）は，これまでに作成された主観的幸福感尺度で測定される主観的幸福感尺度は，日本の老人にもあてはまるものの，その作成はアメリカの文化的背景に強く影響されていることから，上記の3次元以外にも日本文化に特有な主観的幸福感の下位次元が存在している可能性を示唆している。これらの研究における観点以外にも，「幸福な老い」とはなにかを考える上で考慮しなければならない問題は多い。特に，日本が21世紀における世界有数の「高齢社会の国」となっていること（清水，2000）や，長寿化によって老後が長くなった高齢者にとっては，余暇生活のあり方が重要である（一番が瀬他，1994）ことなど，高齢者のおかれている環境や状況がこれまでと異なったものとなりつつあることは，現代の高齢者にとっての幸福とはなにかを追求する上で，避けて通ることのできない問題の一つである。現在を生きる高齢者にとっての，「幸福な老い」について，主観的幸福感以外の様々な側面からも検討し，その理解を深めることは急務である。

以上のような視点から，原田（2001）は，高齢者の時間的態度と，主観的幸福感の関連について検討し，これらの概念が関連を持つことを見出している。時間的態度とは，時間的展望の下位概念の一つであり，過去・現在・未来といった時間に対する感情的評価を指す概念と定義される（白井，1994)。例えば，ある人が，自らの未来・現在・過去に対して肯定的な感情を持つとするならば，その人は，未来や過去も含めた，その人自身の人生に対して肯定的な評価をしていると捉えることができよう。時間的態度が肯定的であるということは，高齢者にとって「幸福な老い」の状態に近いことを意味するのではないだろうか。高齢者を対象とした時間的態度研究は，高齢者の「幸福な老い」についてのアプローチという視点からも有意義なものと考えられる。

しかし，従来の時間的態度についての研究は，主に青年や，成人期を主な対象としたものが多く，高齢者を中心に扱った研究は数少ない。また，時間的態度を測定する尺度も，主に青年期を対象として作成された尺度がほとんどである。特に，高齢者の時間的態度を測定するための尺度はこれまで作成されていないのが現状である。そのため，高齢者の時間的態度を測定するに際しては，

1）名古屋大学大学院教育発達科学研究科

これまで，青年を主な対象として作成された時間的態度尺度を使用することが多かった。しかし，高齢者と青年では時間や人生そのものに対する捉え方が，全く異なったものであることは十分考えられる。特に，高齢者は，人生における残りの時間よりも過去に生きてきた時間の方が長いが，青年はこれから先，生きていく時間のほうが長い。高齢者にとっての未来や過去の認知が，青年とは異なるものになることは自然であろう。例えば，時間の有限性に対する認知は，中年期を転換点として変化することが報告されている。中年期の時間に対する認知についてのいくつかの研究では，中年期において，それまでとは時間に対する認知が逆転し，人生を生まれてからの時間ではなく，後どれくらい残されているかという観点から捉えるようになるという示唆が得られている（長尾，1990；岡本，1985)。このような研究は，高齢者と青年の時間に対する捉え方の差異を示唆している。高齢者を対象とした時間的態度の研究における課題として，まず，青年用の尺度では測定しきれない高齢者の発達段階の特徴を含めた，高齢者用の時間的態度尺度を作成することが必要である。そこで本研究では，そのような高齢者用時間的態度尺度作成の前段階として，高齢者と青年の時間的態度のあり方を比較し，高齢者の時間的態度の特徴について，発達的な側面から検討を進めることを第一の目的とする。

ところで，時間的展望は，動機づけに影響を及ぼすとされる概念である（白井，1995)。従来の研究では，主に，未来を最も重要視するという時間的展望のあり方が，動機づけの中でも特に達成動機づけに有効に働くことが示唆されてきた（Nuttin，1964；Raynor，1969)。しかし，これらの時間的展望研究は，達成動機が有効に作用するとされる青年期を主な対象とした研究である。白井（1995）が言うように，青年期とは異なる発達段階である，中年期や老年期においても同様の結果が得られるかどうかは明らかではなく，またその発達段階において有効な動機づけ自体も青年とは異なってくるかもしれない。特に，高齢者は，社会的目標という将来の目標を達成することが重要な課題となる時期である青年に比べ，職業面や社会的地位面などにおいて達成動機に関わる場面や機会は少ないであろう。この点で，高齢者に対し有効に作用する動機づけが，青年とは異なることは十分に考えられることである。例えば，桝潟（2000）は，高齢者は余暇活動や，それを通じての家族・知人との交流が生きがいとなることが多いことを指摘している。このような場面においては，目標を実現するための達成動機よりもむしろ，余暇活動や交流の場に参加することにつながるような，対人的・社会的な接触を求める親和動機のほうが，高齢者にとっては意味を持つのではないだろうか。時間的態度がこのような親和動機にも影響を及ぼすと仮定するならば，高齢者の時間的態度と親和動機の関連についての検討は，「幸福な老い」についての理解を深めることにつながると考えられる。そこで，本研究では，高齢者の時間的態度について親和動機との関連から検討することを第二の目的とする。

【方　法】

1．調査対象・調査時期

高齢者：N市市内の60歳以上の高齢者が利用する6施設において，質問紙調査を行った。これらの施設はいずれも，高齢者同士の交流や趣味を行う場として利用される施設である。調査は，6施設中5施設においては郵送用の封筒を質問紙とともに配布，調査者が質問紙への記入方法と郵送方法を説明し，各被験者に質問紙を郵送してもらう方法で行った。また，残りの1施設については，施設内に回収箱を設置し，被験者に次回来所した時に質問紙を持参してもらう方法を用いた。調査した時期は，平成12年10月上旬から12月中旬にかけてである。質問紙は6施設で計400部を配布し，回収されたものは計255部であった（回収率63.8%)。255部のうち，明らかに回答に不備があるものを除き，234部（男性71名，女性159名，不明4名）を分析の対象とした。平均年齢は74.0歳（*SD* 6.1，年齢範囲62歳～89歳)であった。

青年：N市市内の国立大学（4年制)の一般教養の3講義において質問紙調査を行い，収集した。調査は，講義の時間のうち，20～30分程度を利用して行い，その場で回収した。調査した時期は，平成12年11月中旬から12月上旬にかけてである。回収された質問紙は計225部であった（男性130名，女性94名，不明1名)。また，主に1・2年生の受講する講義であるため，18～20歳の者がほとんどであった。21歳以上の者は若干名しかいなかった。平均年齢は19.2歳（*SD* 2.2）であった。

2．調査内容

① **時間的態度尺度**　従来，時間的態度研究によく用いられている，白井（1994）の作成した時間的体験展望尺度18項目を用いた。時間的展望体験尺度は，主に青年期を対象として作成され，未来については希望と目標志向性，現在については充実感，過去については過去受容という，時間的態度の4つの側面を区別して測定する。「あてはまらない」から「あてはまる」までの5段階評定（1～5点)。得点が高い方が，時間的態度は肯定的である。

② **対人志向性尺度**（「情緒的支持」，「ポジティブな刺

激」）Hill（1987）の作成した対人志向性尺度（親和動機尺度）を岡島（1989）を参考に和訳した。Hillは親和動機を「情緒的支持」「注目」「ポジティブな刺激」「社会的比較」の下位概念に分類しており，対人志向性尺度も親和動機をこれらの下位概念に分類して測定する。本研究の目的と高齢者の質問紙回答への労力を考え合わせて，対人志向性尺度の下位尺度のうち，「情緒的支持」と「ポジティブな刺激」の2つの下位尺度各7項目，計14項目を用いた。「あてはまらない」から「あてはまる」までの5段階評定（1～5点）であり，得点が高い方が対人志向的である。

③ **主観的幸福感尺度**　古谷野（1990）の作成したLSIKスケールを用いた。LSIKスケールは，主に高齢者を対象として主観的幸福感を測定する尺度である。改訂PGCモラールスケールから5項目，LSIAから3項目，カットナー・モラールスケールから1項目が採用され，計9項目で構成される。「人生全体についての満足感」「心理的安定」「老いについての評価」の3次元からなる。答え方は7項目が「はい」「いいえ」の2段階評価，1項目が「ほとんどない」～「たくさんある」の3段階評価，1項目が「満足できる」～「満足できない」の3段階評定となっており，あらかじめ定められた評価基準により，各項目に0点または1点を採点する。合計得点が高い方が，主観的幸福感は高い。

④ **フェイスシート**　高齢者群については，基本的属性として年齢・性別・配偶者の有無・職業の有無・健康状態を尋ねた。また，青年群については，学年と年齢，性別を尋ねた。

①～④を高齢者群に実施した。また，青年群には主観的幸福感尺度を除く，①②④を実施した。

なお，高齢者群の①③④のデータについては，原田（2001）において用いられたものと同様のデータを使用した。

【結　果】

1．時間的態度についての高齢者群・青年群の比較

(1) 時間的展望体験尺度の因子分析

高齢者の時間的態度における下位尺度の分類については，時間的展望体験尺度についての本研究の高齢者データと同様のデータを用いた，原田（2001）の因子分析の結果と因子名を参考にした（Table 1）。第1因子は「私には，これから先の計画がだいたいある」などのこれから先の目標に関する項目と，「これから先には希望が持てる」という将来への期待に関する項目の因子負荷量が高かった。そこで，未来に対する肯定的な評価という意味をこめて，「未来の肯定的受容」因子と命名された。第2因子は「毎日が同じことの繰り返しで退屈だ」や「私は過去の出来事にこだわっている」などの過去・現在・未来にわたる否定的な項目で構成されるため，過去・現在・未来の時間全般にわたる物足りなさという意味をこめて，「時間全般に対する不足感」因子と命名された。第3因子は「今の生活に満足している」など現在の生活に関する項目の因子負荷量が高く，現在に対する肯定的な評価という意味をこめて，「現在の充実感」因子と命名された。第4因子は「過去のことはあまり思い出したくない」という過去に関する否定的な項目や，「これから先のことはあまり考えたくない。」という未来に関する否定的な項目で因子負荷量が高く，過去や未来への時間的なつながりを否定的に捉えるという意味をこめて，「時間的連続性への否定的態度」因子と命名された。逆転項目は第2因子と第4因子にまとまったため，各因子に負荷の高い項目得点について逆転項目を処理せずに合計し，尺度得点とした。高齢者群を対象とした時間的展望体験尺度の各下位尺度α係数は，「未来の肯定的受容」尺度が.79，「不足感」尺度が.76，「現在の充実感」尺度が.76であり，これらの3因子については十分な信頼性があると考えられる。「時間的連続性への否定的態度」尺度のα係数は.36であり，この因子の信頼性は低いことが示された。高齢者群を対象とした時間的態度尺度の下位尺度間相関をTable 2に示す。「現在の充実感」尺度と「時間的連続性への否定的態度」尺度の有意な相関は見られなかったが，「未来の肯定的受容」尺度と「時間的連続性への否定的態度」尺度の負の相関が5％水準で有意であり，それ以外の各下位尺度間の相関は全て0.1％水準で有意であった。この結果から，高齢者の時間的態度の各側面は，互いに関連していることが示唆された。

また，本研究の目的が，高齢者の時間的展望検討であることを考慮し，青年群の時間的態度下位尺度についても，高齢者群のみのデータを用いた因子分析で抽出された因子と尺度得点を用いることとした。これらの因子を構成する項目の得点を用いた，大学生群の時間的展望体験尺度の各下位尺度α係数は，「未来の肯定的受容」尺度が.78，「不足感」尺度が.74，「現在の充実感」尺度が.73であり，これらの3因子については十分な信頼性があると考えられる。「時間的連続性への否定的態度」尺度のα係数は.22であり，青年群においても，この因子の信頼性は低いことが示された。青年群を対象とした時間的態度尺度の下位尺度間相関をTable 3に示す。その結果，全ての下位尺度相関が有意であったことから，青

Table 1　時間的展望体験尺度の因子分析結果（主因子法，プロマックス回転）N＝234

項　　目	F1	F2	F3	F4
（未来の肯定的受容）				
2　私には，これから先の計画がだいたいある。	.715	−.052	.108	.029
6　私にはこれから先の目標がある。	.693	−.008	.162	.038
14　これから先のためを考えて今から準備していることがある。	.683	.090	−.099	−.003
12　これから先には希望が持てる。	.622	.017	.217	−.024
（時間全般に対する不足感）				
5＊毎日が同じことの繰り返しで退屈だ。	.018	.800	.113	−.090
10＊これから先は漠然としていてつかみどころがないと思う。	−.204	.649	−.101	.024
13＊毎日がなんとなく過ぎていく。	−.270	.594	.265	.031
11＊私は過去の出来事にこだわっている。	.282	.498	−.257	.031
17＊今の自分は本当の自分ではない気がする。	.145	.438	−.250	.226
4＊私にはこれから先がないような気がする。	−.010	.406	−.160	.296
（現在の充実感）				
9　今の生活に満足している。	.104	.114	.761	.053
1　毎日の生活が充実している。	.086	−.218	.674	.170
（時間的連続性への否定的態度）				
3＊過去のことはあまり思い出したくない。	.044	−.018	.122	.560
16＊これから先のことはあまり考えたくない。	−.218	.127	.157	.431
（残余項目）				
8　これから先のことは自分で切り開く自信がある。	.420	−.039	.431	.011
18＊10年後，わたしはどうなっているのかよくわからない。	−.014	.089	−.000	.166
15　私は、自分の過去を受け入れることができる。	.182	.115	.338	−.348
7＊私の過去はつらいことばかりだった。	.096	.301	−.138	.298

		F1	F2	F3
因子間相関	F2	−.385		
	F3	.367	−.327	
	F4	−.221	.383	−.162

＊：逆転項目を示すが，「時間全般に対する不足感」，「時間的連続性への否定的態度」の各因子は逆転項目のみで構成されているため，これらの因子については逆転させずにそのまま用いた

＊：この Table は原田（2001）に掲載されたものと同様のものである

Table 2　時間的展望体験尺度下位尺度間相関（高齢者群）

	時間全般に対する不足感	現在の充実感	時間的連続性への否定的態度
未来の肯定的受容	−.381***	.411***	−.157*
時間全般に対する不足感		−.300***	.306***
現在の充実感			.058

*: $p<.05$　***: $p<.001$

＊：この Table は原田（2001）に掲載されたものと同様のものである

Table 3　時間的展望体験尺度下位尺度間相関（青年群）

	時間全般に対する不足感	現在の充実感	時間的連続性への否定的態度
未来の肯定的受容	−.554***	.386***	−.211**
時間全般に対する不足感		−.612***	.432***
現在の充実感			−.171*

*: $p<.05$　**: $p<.01$　***: $p<.001$

年の時間的態度の各側面は，互いに関連していることが示唆された。

(2) 高齢者と青年の時間的態度の比較

次に，時間的展望体験尺度の各下位尺度と，それを構成する各項目について，高齢者の男女と青年の男女それぞれの尺度得点，項目得点の平均値と標準偏差を求め，世代差および性差を2×2の分散分析によって検討した(Table 4)。以下にその結果を示す。

時間的展望体験尺度の各下位尺度とそれらを構成する項目の世代間での比較

まず，各下位尺度についての世代差では，「未来の肯定的受容」尺度以外の各下位尺度得点に，有意な世代差が見られた。「時間全般に対する不足感」尺度得点は，高齢者群の方が青年群よりも項目得点が低かった。また，「現在の充実感」尺度得点と，「時間的連続性への否定的態度」尺度得点については，高齢者群の方が，青年群よりも項目得点が高かった。これらの結果から，青年に比べ，高齢者の方が「時間全般に対する不足感」が低く，また，現在に対する時間的態度が肯定的であることが示唆された。

Table 4　世代・性差ごとにみた時間的展望体験尺度の因子・項目得点の平均点と標準偏差および分散分析結果

因　　子	高齢者群		大学生群		分散分析		
	男　性	女　性	男　性	女　性	世代差	性　差	交互作用
(「未来の肯定的受容」因子)	13.38(3.64)	12.92(3.67)	12.88(3.93)	13.87(3.10)	.78	.79	4.01*
2　私には，これから先の計画がだいたいある。	3.49(1.15)	3.41(1.16)	3.16(1.27)	3.52(1.11)	.45	1.75	3.52
6　私にはこれから先の目標がある。	3.30(1.20)	3.25(1.24)	3.54(1.23)	3.71(1.07)	9.88**	.34	.89
14　これから先のためを考えて今から準備していることがある。	3.31(1.27)	3.13(1.31)	2.80(1.31)	3.07(1.19)	4.09*	.22	3.28
12　これから先には希望が持てる。	3.23(.94)	3.20(1.06)	3.38(1.06)	3.56(.86)	7.59**	.66	1.14
(「時間全般に対する不足感」因子)	13.61(4.98)	14.41(4.97)	17.84(5.11)	16.81(4.29)	44.59***	.14	3.60
5 *毎日が同じことの繰り返しで退屈だ。	1.99(1.22)	2.17(1.30)	2.95(1.42)	2.59(1.17)	26.70***	.69	4.72*
10 *これから先は漠然としていてつかみどころがないと思う。	2.37(1.26)	2.78(1.21)	3.49(1.14)	3.45(1.07)	57.64***	2.19	3.95*
13 *毎日がなんとなく過ぎていく。	2.72(1.28)	3.14(1.38)	3.62(1.22)	3.46(1.10)	21.51***	.81	5.57*
11 *私は過去の出来事にこだわっている。	2.18(1.10)	1.93(1.08)	2.92(1.24)	3.04(1.15)	71.90***	.25	2.72
17 *今の自分は本当の自分ではない気がする。	2.13(1.07)	2.13(1.22)	2.61(1.37)	2.39(1.18)	8.90**	.86	.79
4 *私にはこれから先がないような気がする。	2.23(1.11)	2.25(1.19)	2.24(1.23)	1.88(1.06)	3.09	2.37	2.75
(「現在の充実感」因子)	8.16(1.53)	8.53(1.59)	6.11(1.90)	7.07(1.79)	103.56***	16.37***	3.11
9　今の生活に満足している。	4.14(.94)	4.29(.95)	2.82(1.18)	3.37(1.04)	115.69***	12.36***	3.87*
1　毎日の生活が充実している。	4.01(.78)	4.23(.83)	3.28(1.00)	3.70(.94)	49.06***	13.21***	1.33
(時間的連続性への否定的態度)	6.04(1.82)	6.63(2.03)	5.19(1.80)	4.80(1.62)	59.07***	.13	7.19**
3 *過去のことはあまり思い出したくない。	3.10(1.28)	3.20(1.30)	2.86(1.26)	2.44(1.04)	19.45***	2.14	4.68*
16 *これから先のことはあまり考えたくない。	2.94(1.13)	3.44(1.29)	2.33(1.14)	2.36(1.13)	55.48***	4.45*	3.82
(残余項目)							
8　これから先のことは自分で切り開く自信がある。	3.46(1.09)	3.14(1.18)	3.55(1.05)	3.43(.89)	3.51	4.25*	.94
18 *10年後，わたしはどうなっているのかよくわからない。	3.63(1.26)	3.67(1.40)	3.97(1.23)	3.79(1.04)	3.02	.41	.77
15　私は、自分の過去を受け入れることができる。	3.77(1.08)	3.67(1.17)	3.84(1.07)	3.88(.99)	1.91	.06	.49
7 *私の過去はつらいことばかりだった。	2.38(1.11)	2.32(1.20)	2.38(1.03)	2.00(.94)	2.87	4.53*	2.16

*: $p<.05$　**: $p<.01$　***: $p<.001$

"あてはまらない" を1，"あてはまる" を5とする5段階評価を得点として分散分析を行った。

* は逆転項目を示し，平均値が高いほど否定的である。

次に，下位尺度を構成する各項目については，多くの項目に，有意な世代差が見られた。「未来の肯定的受容」尺度を構成する項目のうち，“私にはこれから先の目標がある。”“これから先には希望が持てる。”では，高齢者群よりも青年群の方が項目得点が有意に高かった。このことから，未来に対する時間的態度として，青年の方が高齢者よりも希望・目標は高いと考えられる。しかし，“これから先のためを考えて今から準備していることがある。”では高齢者群の方が青年群よりも項目得点が高かった。また，「不足感」尺度，「現在の充実感」尺度のほとんどの項目で，世代差が見られた。「不足感」尺度の項目では，世代差が有意である項目の全てで，高齢者群の方が青年群よりも項目得点が低かった。「不足感」尺度を構成する項目は，過去・現在・未来の全ての次元に渡っていることを考慮すると，高齢者は青年に比べて，時間全般を否定的には受け取っていないと考えられた。また，「現在の充実感」尺度を構成する2項目は，高齢者群の方が青年群よりも項目得点が高かった。また，「時間的連続性への否定的態度」尺度を構成する2項目では，高齢者群の方が青年群よりも項目得点が高かった。これらの結果から，「未来の肯定的受容」尺度以外の下位尺度において，各下位尺度を構成する各項目のうち世代差が見られたものは全て，その項目が属している下位尺度と同じ傾向の世代差を持つことが示唆された。

男女間における時間的展望体験尺度の各下位尺度とそれらを構成する項目の比較

下位尺度における有意な性差は，「現在の充実感」尺度においてのみ見られ，女性の方が男性よりも，現在に対する時間的態度が肯定的であることが示唆された。有意な性差が見られた項目であるが，「現在の充実感」尺度の項目である，“今の生活に満足している。”“毎日の生活が充実している”。の項目において，男性よりも女性において項目得点が高かった。また，「時間的連続性への否定的態度」尺度の項目である，“これから先のことはあまり考えたくない。”の項目で，男性よりも女性において項目得点が高く，“私の過去はつらいことばかりだった。”では，女性よりも男性において項目得点が高かった。この結果から，男性に比べて，女性の方が過去を否定的に受け止めず，現在の生活に対して充実感を持ち満足しているが，未来については考えないようにしていることが示唆された。また，「未来の肯定的受容」尺度では，性と世代の有意な交互作用が見られ，「未来の肯定的受容」は，青年群の男性でもっとも低く，女性でもっとも高いことが示唆された。

2．対人志向性尺度の因子構造と高齢者・青年間の比較

高齢者群を対象として，対人志向性尺度について因子分析（主因子解）を行った結果，2つの因子が抽出された。対人志向性は下位概念どうしに関連があることを，Hill（1987）が指摘しているため，プロマックス回転を施し，因子負荷量は.40以上のものを採用した（Table 5）。その結果，Hill の研究で得られた結果とほぼ同じ項目で因子がまとまったことから，2因子を採用することに

Table 5　高齢者群の対人志向性尺度の因子分析結果（主因子法，プロマックス回転）　N＝234

	項　　目	F1	F2
（情緒的支持）			
12	おちこんでいる時，自分の周囲にいる人に慰めてもらおうとする。	.861	−.152
10	つらい時は誰かに一緒にいて欲しい。	.792	.016
6	気が動転している時，誰かにそばにいて欲しい。	.710	−.013
8	大切なことがうまくいかなかった時，人と一緒にいることで気持ちがまぎれる。	.670	.059
1	物事がうまくいかない時，人と一緒にいることが一番の慰めになる。	.624	.149
3	何か悪いことがあった時にはいつでも，親しく，信頼できる人と一緒にいたい。	.448	.297
（ポジティブな刺激）			
9	いろいろなことを知っている人と一緒にいるのは楽しい。	−.098	.791
5	いろいろな人と一緒にいて，その人たちについて知ることは興味深い。	−.020	.715
2	人を見ていたり，人を理解したりすることは楽しみの一つである。	.077	.687
11	好感を持てる人と友達になれると非常に満足する。	−.048	.681
7	人のそばにいて，話を聞いたりすることが私の楽しみである。	.259	.556
4	私は他の人と一緒にいることで，多くの人が感じる以上に満足が得られる。	.341	.505
		因子間相関	F1
		F2	.544

した。固有値は，第1因子が3.30，第2因子が3.00であった。第1因子は“おちこんでいる時，自分の周囲にいる人に慰めてもらおうとする。”など情緒的な支持を求める項目に因子負荷量が高かったため，「情緒的支持」因子，第2因子は“いろいろな人と一緒にいて，その人たちについて知ることは興味深い。”といった，対人的な刺激を求める項目に因子負荷量が高かったため，「ポジティブな刺激」因子とした。各因子に負荷の高い項目得点を合計し，尺度得点とした。α係数は第1因子，第2因子ともに.86で十分な信頼性があると考えられる。

また，高齢者群と青年群を比較して各尺度間の関係を検討するという本研究の目的から，青年群の対人志向性尺度についても高齢者と同様の下位尺度を用いることとした。青年群の対人志向性尺度下位尺度項目得点のα係数は，「情緒的な支持」尺度で.90，「ポジティブな刺激」尺度で.79であり，十分な信頼性が得られた。また，対人志向性尺度に性差・世代差がみられるかどうかを，分散分析によって検討した（Table 6）。その結果，「情緒的支持」尺度では，男性に比べ，女性の方が高いという性差が，また，「ポジティブな刺激」尺度では，青年に比べ高齢者の方が高いという世代差がそれぞれ見られた。交互作用はいずれにも見られなかった。

3．時間的態度・主観的幸福感と対人志向性の関連

高齢者群を対象とした，時間的展望体験尺度と対人志向性尺度との下位尺度間相関をTable 7に示す。高齢者群については「情緒的支持」尺度は「未来の肯定的受容」尺度以外，「ポジティブな刺激」尺度は「時間全般に対する不足感」尺度以外の時間的展望体験尺度の下位尺度と，それぞれ有意な正の相関が見られた。この結果から，高齢者の時間的態度は，対人志向性と関連することが示唆された。

青年群を対象とした，時間的展望体験尺度と対人志向性尺度との下位尺度間相関をTable 8に示す。「情緒的支持」尺度は「未来の肯定的受容」尺度と「現在の充実

Table 6　世代・性差ごとにみた対人志向性尺度の平均得点と標準偏差および分散分析結果

因　子	高齢者群		青年群		分散分析		
	男性	女性	男性	女性	世代差	性差	交互作用
（対人志向性尺度）							
情緒的支持	19.94(5.40)	22.21(5.21)	18.85(6.37)	21.15(5.22)	3.83	17.06***	.00
ポジティブな刺激	23.39(4.49)	24.33(4.51)	22.03(4.46)	22.57(4.04)	13.52***	2.83	.21

**: $p<.01$　***: $p<.001$

Table 7　時間的展望体験尺度と対人志向性尺度の下位尺度間相関（高齢者群）

	未来の肯定的受容	時間全般に対する不足感	現在の交実感	時間的連続性への否定的態度
情緒的支持	.060	.268***	.199**	.223**
ポジティブな刺激	.236**	.055	.309***	.181*

*: $p<.05$　**: $p<.01$　***: $p<.001$

Table 8　時間的展望体験尺度と対人志向性尺度の下位尺度間相関（青年群）

	未来の肯定的受容	時間全般に対する不足感	現在の交実感	時間的連続性への否定的態度
情緒的支持	.232***	−.116	.296***	−.184**
ポジティブな刺激	.264***	−.242***	.329***	−.243***

*: $p<.05$　**: $p<.01$　***: $p<.001$

Table 9　LSIKと対人志向性尺度の下位尺度間相関（高齢者群）

	人生全体についての満足感	心理的安定	老いについての評価	主観的幸福感
情緒的支持	.070	−.145*	−.049	−.040
ポジティブな刺激	.081	.076	.077	.130

*: $p<.05$　**: $p<.01$　***: $p<.001$

感」と有意な正の相関が見られた。また，「ポジティブな刺激」尺度は時間的態度尺度の全ての下位尺度と有意な相関が見られた。この結果から，青年の時間的態度は，高齢者とは異なる側面で，対人志向性と関連することが示唆された。

また，高齢者群を対象とした，LSIK と対人志向性尺度との下位尺度間相関を Table 9 に示す。なお，LSIK については古谷野（1990）を参考に，あらかじめ定められた3つの下位尺度（「人生全体についての満足感」「心理的安定」「老いについての評価」）と，LSIK の全ての項目を用いた主観的幸福感尺度を用いた。その結果，LSIK の各下位尺度のうち，「心理的安定」尺度は，「情緒的支持」尺度と5%水準で有意な正の相関がみられたが，他の尺度間では有意な相関はみられなかった。この結果から，高齢者の主観的幸福感は，対人志向性とほとんど関連を持たないことが示唆された。

【考　察】

本研究では，高齢者の時間的態度の特徴について，発達的な側面や動機づけとの関連から検討した。その結果，高齢者と青年では未来や現在，過去といった時間の各次元や各側面における時間的態度の特徴が異なること，高齢者の時間的態度は親和動機に関連することを見出した。

1．高齢者の時間的態度の発達段階面での特徴

(1) 時間的態度の下位尺度や項目に世代差が及ぼす影響の検討

高齢者の時間的態度の特徴について，発達的な側面から理解を深めるため，時間的展望体験尺度の各下位尺度と，それらを構成する項目について，青年との比較を行った。その結果，下位尺度における世代差としては，青年に比べ，高齢者の方が「時間全般に対する不足感」は低いこと，また，「現在の肯定的受容」と「時間的連続性への否定的態度」が高いことが見出された。この傾向はこれらの尺度を構成するほとんど全ての項目について見出された。このことは，時間的展望体験尺度によって測定される時間的態度のこれらの下位概念においては，青年と高齢者という異なる発達段階であっても，同一尺度内での項目が発達段階における差異に影響を及ぼされないことを示している。

それに対して，「未来の肯定的受容」尺度では，高齢者と青年の間に世代差が見られなかった。この尺度を構成する項目のうち，目標や希望に関連する項目は青年の方が高齢者よりも高いことが見出された。しかし，“これから先のことを考えて今から準備していることがある。”という項目では，高齢者の方が青年よりも項目得点が高かった。山口（1996）は，高齢者の未来展望の核となるのは，心身の自立性と死であると述べて，青年期の時間的展望との質的な異なりがあるとしている。ここで，高齢者が“これから先の準備”と考えている内容には，青年とは異なる，例えば，自らの死に対する準備のような意味合いまで含まれているかもしれない。このことから，「未来の肯定的受容」尺度で高齢者と青年の間に世代差が見られなかったことについても，一つの尺度の中に，高齢者と青年では異なる解釈が成り立つ項目が含まれていることが影響している可能性がある。高齢者の時間的態度を扱う際には，青年期とは異なる高齢者独自の文脈の影響を視野に入れることが必要であると考えられよう。

(2) 発達段階から見た高齢者の時間的態度の特徴

本研究における「時間全般に対する不足感」では過去や現在，未来といった時間の各次元におけるものたりなさが取り扱われている。ここでは「時間」という概念は過去・現在・未来といった次元に分類して捉えられていない。むしろ，時間を大局的にとらえ，自らの生きている「人生」そのもののようなものとして感じていると考えられる。このような視点で「時間全般に対する不足感」を捉えると，「時間全般に対する不足感」における世代差は，青年に比べて高齢者のほうが自らの人生に対する不満の低いことを示していると考えられる。また，「現在の充実感」における世代差は，青年に比べて高齢者のほうが現在の生活に満足していることを示していると言えよう。これらの知見からは，一見，高齢者の方が青年に比べて，人生や現在の状態の方が不満となる要因が少なく，満足できる要因が多いという好ましい状況におかれているように見える。しかし，高齢者が生きてきた，また，これから生きていく環境や歴史といった文脈と，青年のそれとを比較した場合，このような解釈だけで終わってしまうことは危険であろう。むしろ，戦争や様々な困難を潜り抜けて苦労してきた現代の高齢者にとって，自らのおかれている文脈を肯定的に見ることが必要なのかもしれない。

また，「時間的連続性への否定的態度」尺度の尺度得点とそれを構成する2項目の得点において，高齢者群の方が青年群よりも高いことが見出された。「時間的点属性への否定的態度」尺度を構成する項目は，「時間全般に対する不足感」尺度を構成する項目と同じで，時間的態度の否定的な側面に対する項目である。しかしながら，「時間全般に対する不足感」尺度を構成する項目においては，青年群の方が高齢者群よりも得点が高かったこととは対照的な結果を示唆しており，興味深い。「時間的連続性への否定的態度」尺度を構成する，“過去のことはあまり思い出したくない。”や“これから先のことは

あまり考えたくない。”という項目は，過去と未来という違いはあるものの，考えをめぐらすことを回避するということについては共通する項目である。高齢者の方が青年に比べて，これらの項目得点が高いという本研究の結果は，過去や未来について嫌なことは考えないという，ストレス回避の手段を，高齢者はとる傾向が強いことを意味しているのかもしれない。本研究では，これらの項目で構成される因子を，過去と未来を連続的に捉えないという意味で，「時間的連続性への否定的態度」因子と名づけたが，実際は「時間的態度のストレス回避的な側面」を測定している可能性がある。高齢者の時間的態度の特徴について検討し，尺度を作成するためには，このような高齢者の時間に対する評価の基準や構え自体についても考慮することが必要であろう。

(3) 性差から見た高齢者の時間的態度の特徴

時間的展望体験尺度の各下位尺度やそれらを構成する項目について性差を検討したところ，「現在の充実感」尺度とそれを構成する2項目では，世代差とともに，女性の方が男性よりも高いことが示唆された。つまり，青年においても，高齢者においても，女性の方が現在について満足感を抱いているといえる。このことは時間的態度には，発達段階にかかわりなく，性差によって説明される部分があることを示している。このような発達段階によって変化しない特徴や傾向を検討することにより，青年期や中年期を対象とした従来の時間的展望研究で得られた知見とのつながりから高齢者の時間的態度を捉えることができるであろう。今後は，時間的態度について，高齢者と他の発達段階の比較といった世代差とともに，発達段階によってそれほど変化しないという意味で安定した側面に目を向けることも必要になってくると考えられる。

2．高齢者の時間的態度の対人志向性との関連

(1) 世代差・性差から見た高齢者の対人志向性の特徴

Hill（1987）は，対人志向性尺度によって測定される親和動機の下位概念のうち，「情緒的支持」は少数の安心できる人たちに対してつらい時の援助を求める志向性であり，「ポジティブな刺激」は多数の人とつきあいたい，自分が興味のもてる人と一緒にいたいという自ら進んで人に接触を求めようという志向性であると定義している。本研究では親和動機のこれらの下位概念について，高齢者を対象に，青年との世代差や性差を比較した。まず，「ポジティブな刺激」については，高齢者の方が青年よりも高いことが見出された。この結果は，高齢者の方が青年よりも，自らの楽しみのための人との接触に強く動機づけられることを示している。高齢者の対人関係については，コンボイ・モデル（Kahn & Antonucci, 1980）で示されるように，社会的な役割が減少するにつれて，その役割に関連する対人関係が少なくなり，人数の上からも，また種類としても，対人関係の幅が徐々に狭まっていくことに着目した研究が多い。また，最近の研究では，高齢者は情緒的で安定した対人関係を好み，対人関係の縮小にも満足している（Ryff, 1982, 1989）ことが示唆されている。また，Schaie & Parham（1976）は，青年期から老年期までを対象とした研究で，世代差として内向性が示され，老年期は，他の発達段階に比べて，内向性が強いことを報告している。これらの先行研究の知見からは，高齢者は狭い範囲での対人関係に生き，また，それを好むことがうかがえる。しかし，本研究の結果は，高齢者たちの中には，少なくとも青年よりも積極的に対人関係の幅を広げたいと思っている者もいることを示唆している。このような高齢者の対人関係面での広がりを求める自発的，積極的な動機づけの側面について検討していくことは今後の課題である。

また，「情緒的支持」については女性の方が男性よりも高いという性差を見出した。つらい時に援助を求めるという動機づけは発達段階に関わりなく，女性の方が高いと言えよう。Eccles & Harold（1992）は，男性は達成的な目標に動機づけられる傾向があるが，女性では対人関係や援助行動に関係する目標に動機づけられる傾向があることを見出している。本研究の結果は，親和動機の一側面においては高齢者であるなしに関わらず，上記の研究と同様の傾向があることを示している。動機づけについて，発達段階によって変化しないこのような特徴や傾向について検討を進めることで，青年期や中年期を対象とした従来の動機づけ研究で得られた知見とのつながりから，高齢者の動機づけの特徴をより明確に捉えることができるであろう。

(2) 対人志向性との関連から見た高齢者の時間的態度の特徴

高齢者群を対象とした，時間的展望体験尺度と対人志向性尺度との下位尺度間相関を検討したところ，「情緒的支持」尺度は「未来の肯定的受容」尺度以外，「ポジティブな刺激」尺度は「時間全般に対する不足感」尺度以外の時間的態度の下位尺度と，それぞれ有意な正の相関が見られた。このことから高齢者の時間的態度の各下位概念は，親和動機を高める方向に影響を及ぼすと考えられた。「未来の肯定的受容」・「現在の充実感」と親和動機の関連から，現在・未来に対する時間的態度が肯定的である方が，対人的動機づけが高くなるといえよう。また，「時間全般に対する不足感」尺度も，対人志向性尺度のうち，「情緒的支持」尺度と正の相関を持つこと

が見出された。このことから，高齢者にとって，時間に対する肯定的な評価だけでなく，一見，時間的態度の否定的な側面に見える「時間全般に対するものたりなさ」も，対人的動機づけを高めることが示唆された。自らの人生に対するものたりなさのような評価も，対人関係における高齢者の積極性をうながすには有効なのかもしれない。

また，青年においても未来・現在に対する肯定的な時間的態度は，対人志向性を高めることが見出された。この結果は，世代差に関わらず，未来や現在に対する肯定的な時間的態度が対人志向性を高める方向に影響を及ぼすことを示唆しているといえよう。しかし，青年においては，高齢者とは異なり，「時間全般に対する不足感」や「時間的連続性への否定的態度」の側面は，対人的動機づけを低める方向に関連していた。このような結果は，高齢者と青年では，時間的態度が対人志向性におよぼす影響のありかたが異なる側面があることを示していると考えられ，「時間全般に対する不足感」などの高齢者にとっての意味について，今後さらに検討を進める必要性があろう。

(3) 対人志向性・主観的幸福感との関連から見た高齢者の時間的態度の特徴

本研究においては，主観的幸福感は，対人志向性には関連がほとんどみられなかった。対人志向性を高く持つことは，高齢者の「幸福な老い」には関連しないのであろうか。Larson (1978) は，高齢者の主観的幸福感に影響を及ぼす要因をレビューし，健康の次に，社会的経済的地位とともに，社会的活動と社会的相互作用が主観的幸福感を高める重要な要因であることを述べている。また，小林・渡辺 (1981) は，老年期において生きがい感を強く持っている人は，他者への関心を強く持っており，他者に対して積極的に関わることを見出している。これらの知見から，自らにとって意味のある時間を過ごすための自発的・積極的な他者との交流は幸福な老いのための重要な要因のひとつだと思われる。その意味で，対人志向性が時間的態度とは関連をもつ一方で，主観的幸福感との関連が見出されなかったという本研究の結果は興味深い。先にも述べたように時間的態度は，動機づけに影響を及ぼすとされる時間的展望の下位概念である。時間的態度は，積極的・自発的な行動のための動機づけに影響を及ぼす点において，主観的幸福感とは異なる「幸福な老い」の切り口として位置づけることができるかもしれない。

3．最後に

本研究では，高齢者の時間的態度の特徴について，発達的な側面や動機づけとの関連から検討し，考察を行ってきた。しかし，ここでの結果は探索的に得られたものに過ぎず，考察は可能性を示唆しているに過ぎない。また，本研究で協力してくださった高齢者群の被験者の方々は，友人との交流や趣味を行う場としての施設を利用されるような，いわゆる元気なお年よりであり，高齢者を代表するサンプルとしては偏っていると思われる。しかし，それらの点を考慮した上であっても，本研究で得られた示唆の中には，高齢者の時間的態度について研究を進めることの意味や，尺度作成へ向けた特徴把握などの面を検討する上で，有意義なものが多かった。これまでに得られた知見を元に，高齢者用の時間的態度尺度を作成し，あらためて高齢者の時間的態度についての検討を進めることが今後の目標である。

【引用文献】

Eccles, J., & Harold, R. 1992 Gender differences in educational and occupational patterns among the gifted. In N. Colangelo, S. G. Assouline, & D. M. Amronson (Eds.), : *Talent development Proceedings from the 1991 Henry B. and Jocelyn Wallace National Research Symposium on talent development (pp. 3-29)*. Unionville, NY: Trillium Press.

Kahn, R. L. & Antonucci, T. C. 1980 Convoys over the life course: Attachment, roles and social support. In P. B. Baltes and O.G. Brim (Eds.) *Life span development and behavior*, Vol. 3. Academic Press.

河野あゆみ・金川克子　1998　在宅高齢者の主観的時間に関する研究 －性，年齢，日常生活自立度との検討－　老年社会科学，**20**，25-31.

児玉好信・古谷野亘・岡村清子・安藤孝敏・長谷川万希子・浅川達人　1995　都市壮年における望ましい老後の生活像．老年社会科学，17，66-73.

原田一郎　2001　高齢者の時間的態度と主観的幸福感の関連について　名古屋大学教育発達科学研究科紀要（心理発達科学），**48**，153-161.

Hill, C. A. 1987 Affiliation Motivation: People Who Need People… But in Different Ways. *Journal of Personality and Social Psychology*, **52**, 1008-1018.

一番が瀬康子　1994　日本人のライフスパンと余暇問題 (1)　一番が瀬康子（編）　余暇生活論　有斐閣

Pp123-131.

古谷野亘・柴田博・芳賀博・須山靖男　1989　生活満足度尺度の構造　老年社会科学，**11**，99-115.

古谷野亘・柴田博・芳賀博・須山靖男　1990　生活満足度尺度の構造－因子構造の不変性－老年社会科学，**12**，102-116.

Larson, R. 1978 Thirty Years of Research on the Subjective Well-being of older Americans. *Journal of Gerontology*, **33**, 109-125.

Lawton, M. P. 1972 The Dimensions of moral. In D. P. Kent, R. Karstenbaum, & S. Sherwood (Eds.) *Reserch Planning and Action for the Elrderly: The Power and Potential of Social Science*. Behavorial Publication.

Lawton, M. P. 1975 The Philadelphia Geriatric Center Moral Scale: A revision. *Journal of G erontology*, **30**, 85-89.

桝潟俊子　2000　高齢期の余暇と家族　染谷俶子（編）老いと家族；変貌する高齢者と家族　ミネルヴァ書房　Pp81-105.

長尾博　1990　アルコール依存症者と健常者との中年期の危機状況の比較　精神医学，**32**，1325-1331.

Neugarten, B. L., Havighhurst, R. J., & Tobin, S. S. 1961 The Measurement of Life Satisfact ion. *Journal of Gerontology*, **16**, 134-143.

Nuttin, J. 1964 The future time perspective in human motivation and lerning *Acta Psychol ogica*, **23**, 60-82.

岡本祐子　1985　中年期の自我同一性に関する研究　教育心理学研究，**33**，295-306.

岡島京子　1989　保育者をめざす学生の親和動機の構造と保育者志向性との関係について　東京学芸大学紀要　第1部門　教育科学，**40**，159-163.

Raynor, J. W. 1969 Future Orientation and Motivation of Immediate Activity: An Elaboration of the Theory of Achievement Motivation *Psychological Review*, **76**, 606-610.

Ryff, C. D. 1982 Succesful Aging: A Development Approach *The Gerontologist*, **22**, 209-214.

Ryff, C. D. 1989 Happiness is Everyting, or is it?: Explorations on the Meaning of Psychological Well-being *Journal of Personality and Social Psychology*, **57**, 1069-1081.

Schaie, K. W. & Parham, I. A. 1976 Stability of adult personality traits: Fact or fable? *Journal of Personality and Social Psychology*, **34**, 146-158.

清水浩昭　2000　人口学的にみた高齢期家族の特徴　染谷俶子（編）老いと家族；変貌する高齢者と家族　ミネルヴァ書房　Pp13-33.

白井利明　1994　時間的展望体験尺度の作成に関する研究　心理学研究，**65**，54-60.

白井利明　1995　時間的展望と動機づけ　－未来が行動を動機づけるのか－　心理学評論，**38**，194-213.

山口智子　1996　高齢者の回想：主観的幸福感・時間的展望との関連　名古屋大学教育学部紀要（教育心理学科），**43**，163-173.

（2002年9月30日　受稿）

ABSTRACT

A study of time attitude in old-aged persons
: A comparison of time attitude between older and younger people.

Ichiro HARADA

The purpose of this paper was to make clear the characteristics of time attitude in old-aged persons, especially by comparison between older and younger people. 234 old-aged persons, ranging in age from 62 to 89, and 225 young-aged persons, ranging in age from 18 to 22, living in Nagoya City, Aichi responded to Experiential Time Perspective Scale, Life Satisfaction Index K (LSIK), The Interpersonal Orientation scale and face seat. The main results were as follows: (1) Factor analysis of items of Experiential Time Perspective Scale yielded four factors: "affirmative acceptance of future", "present-fullness", "feeling of shortage to the whole time" and "negative attitude to temporal continuation". (2) The results of the survey, several parts of time attitude in old-aged persons showed different characteristics from those in young-aged persons. Especially, "present-fullness" and "feeling of shortage to the whole time" in old-aged persons were higher scores than those in young-aged persons. (3) All subscales of Experiential Time Perspective Scale in old-aged persons showed significant, positive correlations with subscales of The Interpersonal Orientation scale. And the result was different tendency from the relation between Experiential Time Perspective Scale and The Interpersonal Orientation scale in young aged persons.

Key words : time attitude, successful aging, affiliation motivation, subjective well-being, Experiential Time Perspective Scale